K1)
昭和42年2月24日東国特殊局号
昭和40年3月8日第三種郵便物認可（毎週一回金曜日発行）
1970年10月30日 第246号

☆帝国主義国、後進国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独―世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟

10月30日
週刊
第246号
編集発行人 [illegible]
一部 20円
購読料 20回500円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2―7―6滝沢ビル内電話代表03(261)2961 振替 東京 76110
大阪支局大阪市都島区都島中通3―7―16
電話 06(921)1457
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町78―29 0075(701)0025
名古屋支局 052(261)6075

1日 自衛隊パレード粉砕闘争
9時 清水公園
15日 沖縄国政参加選挙粉砕闘争

10·21の成果打ち固め11·1自衛隊パレード粉砕へ！

反帝線戦、全国で叛軍闘争を圧倒的ヘゲモニーの下に展開

全国の同志諸君！青年労働者・学生諸君！戦旗読者諸君！

われわれは、10・21防衛庁攻撃闘争の成果を、❶昨4・28闘争以来の、熾烈な党内、分派、党派闘争を経たわが共産同の圧倒的組織的登場、❷赤軍派、叛旗、情況との党派闘争の結着、彼らの解体、❸反帝戦線―叛軍行動委路線の定着、❹反帝統一戦線の再編のわれわれのヘゲモニーの下での進行、として踏まえてきた。

そして更にわれわれは、10・25名古屋自衛隊パレード粉砕、10・26小西叛軍裁判勝利全関東総決起集会、10・28―29小西叛軍裁判闘争における圧倒的ヘゲモニーを確立したのである。

第三回小西公判闘争

10·28―29 AIF現地最大部隊で闘う

一〇・二九小西三曹の裁判闘争勝利のための全国叛軍討論集会が裁判闘争に先立つ、二八日現地新潟大学医学部講堂においてもたれた。小西三曹を迎え各地区叛軍行動委の結集をもってかちとられたのである。とりわけ、この間防衛庁―基地解体闘争を地区叛軍行動委の建設をもって闘い抜き、新しき地平を切り開かんとしているわが反帝戦線の部隊は二〇名の先発部隊と今秋現地において結成をかちとった新潟地区反帝戦線の部隊一〇数名計五〇名でもって勝利的にかちとったことを報告する。

すなわち唯一わが共産同が小西裁判闘争を革命戦略の問題として鮮明にとらえ、地区叛軍行動委、地区共闘の推進をもって、又具体的に自衛隊の隊内工作を進展させることをもって叛軍裁判闘争を帝軍解体の闘いとして措定していることを明確に示しえたのである。

集会後、地裁包囲デモを降りしきる雨の中を断固貫徹し、地裁前への泊り込み部隊を送りその日の日程を終えた。

翌二十九日この叛軍裁判闘争に我が赤ヘルの後続部隊百名を越える部隊が現地新潟に結集した。他党派は、前回三百名の部隊を送り込んだ中核派は八〇名足らず、青解四〇名、この現地において第一党派の伝統と歴史をもつはずのフロントが二〇名、四トロ一〇数名で、我が赤ヘルの部隊は二百名以上の密集した部隊として現地新潟に第一党派として登場したのである。

現地の集会は一二時半より新潟大学グラウンドにおいて開催された。わが反帝戦線議長からは叛軍裁判闘争は中核派諸君のいうような合憲違憲論争をはるかに越え、日帝の軍事外交路線が三次防―四次防にも見られる如く侵略、反革命同盟の再編として長期的展望のもとに再編されていること、そのもとに自衛隊が侵略、反革命軍隊として育成されていること、また小西三曹が自衛隊の帝国主義軍隊解体の闘争に闘いを措定しているという現実を見るならば、われわれの闘いは必然的に革命の戦略として、そして六〇年代型の全国全共闘という虚列組織の枠を越え、政治バクロ、大衆カンパニアの「死」を止揚したものとして、恒常的武装闘争を権力闘争に向けて闘わねばならない。それは帝軍解体―正規軍建設―ソビエト型組織の建設の戦略的スローガンをもって一つ一つ闘いとられねばならない。

以上のことを一体われわれの防衛庁闘争とは何んなのか理解せず人民総武装のみを呼号している諸君に対して激しく降って来た雨の中、断平とした発言があった。他党派の隊列を尻目にわれわれは雨中にもかかわらず終始密集した集会をもち続け諸派を圧倒した他党派においては東京の10・26小西叛軍裁判闘争勝利の集会を闘わなかったフロントが軍事の問題を今もって理解しないまま小西叛軍裁判闘争を支援闘争に陥し込めようとしている。中核派にあってはあいも変らず「アジア侵略を内乱に」のスローガンをくり返し内乱時死闘の時代をつくり出すために、第二、第三の小西を獲得するために叛軍闘争を闘うという60年代階級闘争の総括をなんら実体化し得ないまま技術的に乗り切らんとし、70年代階級闘争に遅れまいとするアセリと動揺がうかがわれた。青解にあっては階級裁判粉砕の闘いを今もって抜け切らず、一般的に一般兵士をいかに獲得していくのか述べているだけであった。

集会後雨中を地裁包囲デモをわれわれ赤ヘル部隊をはじめとして再度密集した隊列で断固貫徹した。

デモ終了後五時半より小西三曹を迎え裁判闘争の報告集会が医学部講堂で開催され、裁判の様子は別記事の通りであるが、主流派として登場しているわが赤ヘル部隊からは渋谷叛軍行動委、神田地区叛軍行動委代表の二名の発言があり、混乱するばかりの諸党派に対して圧倒的優位性を示し叛軍闘争に関心を寄せる大衆の注目をあびた。

また、この現地闘争においてこの叛軍行動委運動をさらに具体的に推進してゆくために来る第四回公判の前日、十二月九日に全国叛軍行動委の連絡会議の結成を全員で意志一致した。

われわれ叛軍行動委は具体的に自衛隊の隊内工作を推進してゆくことをもって、組織化を進め、防衛庁―基地解体の闘争を再び新潟の地でもって第一党派として登場し、更に前進させてゆくであろう。

権力、傍聴権を強行的に弾圧

小西叛軍第三回公判は、二十九日午後一時、新潟地裁において開かれた。本公判は、すでに第二回公判において弁護団及び小西叛軍兵士から提起されていた、二十四項に及ぶ釈明要求の取扱いをめぐって、この公判闘争全体の帰すうを決する重大な意味をもつものであった。

だが、結果からいえば、第三回公判はかかる本来的な任務を果しえず、あとにのべるような地裁側の強硬な独走警備―傍聴者、傍聴権への弾圧に対する闘争に終始せざるをえなかったのであり、しかしながら第三回公判闘争はこの傍聴権剥奪との闘争そのもの自体としてよりは、かかる経過を媒介として、本公判における闘争の争点がより鮮明化されたものとしてとらえ、叛軍公判全体の意義をあらためて確認させたものとして総括されなければならないであろう。

公判自体の経過は、すでに周知のように第二回公判において問題となったヘルメット、カメラ等の延内使用要求に端を発するものであった。しかし当日この問題発生以前に地裁側は前回公判を上まわる規制をもって、地裁構内入口において傍聴者の荷物を点検し、一方的にとりあげる弾圧に出た。あたかも数分前の地裁拡声器通告で、法廷入口で持物を預を旨の通告をこえて、一方的に強行された規制をめぐって傍聴者は延吏に対する抗議と地裁当局の責任者は延吏に対する抗議と地裁当局の責任者の出頭を要求し、なおも警備員が規制強行をする事態をめぐって紛糾した。

裁判長の弁明を条件として、ようやく午後三時すぎ開廷されたが冒頭藤野裁判長は（イ）地裁周辺の事態によって警備を強化したのは当然だ（ロ）今後も午前中の情勢によって警備を滞える旨言い放ち、これに対し、弁護団、小西、叛軍兵士よりただちに傍聴人代表者の発言をみとめ、正確な事情を聴くべきだとの要求が強くだされたが、裁判長は、その考えはないとして一方的にこれを却下、検察側もゴマすり発言をもって裁判長の訴訟指揮（発言禁止・一名退廷）を支持したのであった。

かかる応酬と紛糾のうち第三回公判は審理に入りえず閉廷した。この紛糾の全責任は当然にも第一回、第二回を通じて明きらかなように地裁当局にある。しかし一般的に考えられるようにこの問題の原因が地裁当局の事務的手続不備にあるというより、かかる諸事態をつくりだしていること自体、敵権力からする小西叛軍公判の本質的展開である。すでにナイキ訴訟の福島判事問題においてみるように司法行政を通しての日帝政治委員会の「自衛隊裁判」指導が着実に具体化せられ、叛軍公判もまた東京地裁、地検よりの裁判官、検事、延吏にいたるまでの「派遣」体制として、すでに敵権力体制における一切の抑圧体制の完成の一環たることにおいて例外ではない。それ故たんに公判の実質審理だけでなく、一切が叛軍公判の内実及び争点をはらみ、露呈させるものである。かかる意味において、われわれは叛軍公判における個別戦術の到達的展開そのものよりも、それを叛軍公判の階級的深化―反革命政策の焦点として凝集せしめ、かかる総体に対し、帝軍解体―革命の正規軍建設の旗の下、地区叛軍行動委への結集組織強化を貫徹することをめざし、第四回公判以後の局面を闘いぬかねばならない。

なお公判日程は、第四回十二月十日、第五回一月二九日、第六回三月一日、いずれも午後一時新潟地裁。

反帝戦線新潟現地に圧倒的に登場

日帝の新たな軍事外交路線（防衛白書）（四次防）に対決し更なる叛軍闘争を

全国の革命的同志諸君、戦旗読者諸君、国家権力や商業ジャーナリズムが鳴り物入りの大宣伝で、「安保闘争は終った」とか「新左翼は後退している」とかの願望を並べたてていたにもかかわらず、一〇・二一国際反戦デー闘争は、わが反帝戦線千四百名の大結集を頂点にした首都二万余名の防衛庁攻撃闘争を始めとして、全国各地で爆発的な昂揚をかちとった。革命的左翼の力は六九年の敗北の総括過程をへる中で、さまざまな屈折をしつつも、市民社会の奥深く根づき、新たな質で武装された陣型が生まれつつあることが見事に証明されたのである。

防衛庁攻撃闘争の意義

一〇・二一闘争は、その組織化の渦中から、実に多くの教訓化すべき問題を孕んでいた。

第一に、いかなる政治路線をもって一〇・二一を闘うのかであり、日共・革マルは論外としても、革命的左翼内部においてすら、決定的な対立が存在しており、昨秋「安保決戦」へ向かう状況とは決定的に異なる局面に直面したのである。それは七〇年代階級闘争の内実をめぐる党派闘争を本質的に内包しつつ、直接的には今秋期の課題をめぐっての論争であった。ML・中核等の諸君は「入管・沖縄・叛軍」を並列的に提起しつつ政治過程の自然発生性に全面的に拝跪して、実践的には「入管決戦主義」に転落し、入管闘争のノンセクト活動家諸君にさえ乗り越えられてしまったのである。

残念ながら彼らは政治過程に一対一的に対応し、「決戦」を叫号する術はあっても、六九年の敗北を革命的に止揚した地平におけるすぐれてラディカルな戦略、戦術には思いもよらなかったのである。彼らには「軍事の問題」をいかに場所的に実践していくのかという根本的命題とはおよそ無縁なのである。昨秋の情勢の煮つまりの中で、彼らも直感的ではあれ、軍事にぶつかり、極めてプラグマチックではあったが、その取りこみに全力をあげた筈である。しかしながら、そのことが何一つ、系統的に確立されず、今や全く忘れ去られているのである。

われわれはこうした腐敗した傾向に対して、一〇・二一闘争を契機として大胆な党派闘争を展開してきた。個々の政治的現象としてある今日的な階級関係の中で、それを総体として規定する日本帝国主義の基本的な攻撃に対する闘争こそ最も重要であり、それを現在的な全人民的政治闘争の環に設定していくこと、これがわれわれの立場である。

まさに現代帝国主義の死活をかけた攻撃が、国際市場―国際金融を軸にした帝国主義相互の矛盾と対立の激化を内包し、それに突き動かされつつも、国際反革命―統一市場の防衛の第一義性故に、それは国際反革命（同盟）の強化を再編する中で軍事外交路線を展開していく政治軍事過程として外化することを明確に押えた上で、われわれはかかる構造が日帝にあっては第三次防から第四次防への飛躍を接にしてなされようとしている自衛隊の帝国主義軍隊としての確立と、七二年沖縄「返還」による自衛隊の海外派兵としてあることを見抜き、これと全面的に対決する闘いを、帝国主義軍隊の解体を戦略的に展望した革命的叛軍闘争として措定したのである。

法務省デモか防衛庁デモかの論争は、かかる本質的な問題の現象形態であったのであり、我々は中核派との党派闘争に打ち勝ち、総体として防衛庁デモへ牽引したのである。

第二には、反帝統一戦線の革命的再編がドラマチックに進行していること、我々がその起動力となっていることに注目しておかなくてはならないであろう。そのことは我々が千四百名の圧倒的動員を実現しはっきりとした組織的前進を実現しているのに対して、中核派は千五百名にとどまり、六月闘争の時点から大幅に後退していること、あるいはML派のごときは百名にも満たない極少党派に転落していることに端的に示されている。

このことは単に動員力・組織力の量的増減として意味があるだけではない。七〇年代階級闘争をいかに闘っていくのかをめぐって、反帝統一戦線の性格をいかに再編成していくのかが焦点なのである。中核派はその意味で完全に破産しているのである。「党の同心円的拡大」の草刈場としてしか位置付けえない中核派にあっては、「統一行動戦術」はあっても、統一戦線を革命論的に対象化することはおよそ縁遠いことなのであり、従って量的多数派としての規定力が鈍化するや彼らは行き詰ってしまったのだ。

他方、後進国「革命」願望派のML・四トロ、プロ学同、フロントらは主体的立場を喪失した大衆でしかないが故に、問題外である。社会党解放派にあっては、反帝学評―「全学連」―全共闘の区別と連関性の解明の欠如という根本的限界性に規定されつつ、相いも変わりなく「プロ統」の空間的＝時間的拡大が「ソヴィエト運動」＝共産主義運動と等置される空疎な社会革命主義であり、全共闘運動の総括も一切明きらかにしえていない。

一体「安保決戦」の総括は何んであったのか？それは一方において「軍事」の問題をどのようにして革命的前衛党が対象化していくのかであり、他方において、これと結合して大衆運動を媒介にしての階級形成の質がどのような段階へ押し上げられていくべきなのかということである。

政治闘争の課題が個別的なものから、全人民的なものと上昇していく過程一般が重要なのではないむしろかかる過程を創出していく実体の主体的飛躍が重要なのである。権力闘争を射程に入れつつ全人民的政治闘争を闘っていく時、それはプロレタリアートにとって一つの飛躍であり、従来の自己そのものとの決別であり、かかる問題が運動組織論的に対象化されていかなければならないし、それは革命党の任務である。69年安保決戦で問われた問題の、一つは教育学園闘争から安保粉砕・日帝打倒闘争への飛躍を追求した全共闘運動が何故に、敗北を余儀なくされたのかということである。即ち、全人民的政治闘争の発展過程は闘争主体の意識の上昇過程のみによって実現されるのではなく、プロレタリアートの階級的団結の物化された形態としての組織構造そのものが、プロレタリアートの支配階級としての組織形態＝ソビエトに向けて過程的に前進していかなくてはならないことであり、革命党の大衆運動への指導はこのことに眼目があるのである。

従って反帝統一戦線は現在的に全共闘・反戦に依拠する古い形態から、地区共闘の創出によるソビエト型組織へと再編されていかなくてはならない。一〇・二一闘争において、かかる問題に対して全く驚くほど無自覚な諸君に対するわれわれの全面的な党派闘争が展開されたのだ。統一戦線論を対象化できず、大衆運動の局面局面への政策協定一般としてしか問題を設定できない諸君は、結局反動的桎梏に転落していくであろう。

われわれは反帝戦線―叛軍行動委員会の赤ヘル部隊の大衆の創出により、確固として再編を押し進めていく基礎を固めることができた「全共闘しがみつき」の反動性を大胆に暴露し、地区共闘創出に向けて前進していかなくてはならない。

第三には「軍事」の問題をめぐって鮮明な亀裂が生じていることである。中核派の諸君は「今は防衛だ」と全面的なカンパニアに終始し、自ら提起した「十一月決戦の地平の拡大」なることとは余りにもほど遠い。他方本質的には先進的な大衆であり、党がいかに軍事を組織するのかについては「軍事への一面化反対」として回避する社会党解放派は、組織的な軍事の形成を何一つ実践できずに、自己の左翼性の証しとしてしか、機動隊に対決することができないのだ。

われわれは軍事を組織する党の内実をはっきりと一〇・二一闘争において実践しえた。わが反帝戦線の最も信頼する革命的な同志諸君は、六本木交差点において、一斉に機動隊に突撃し、完全にこれを突破し、機動隊を周章狼狽させる大成果をあげるとともに、一〇・二一闘争がまぎれもなく、防衛庁攻撃闘争としてあることを全てのプロレタリアート人民の前に一点の曇りもなく明きらかにし、この日の闘争の焦点を作り出した反帝戦線―叛軍行動委員会が長蛇のデモ隊列にもかかわらず、極めて戦闘的なジグザグデモを貫徹しぬき、これを出撃拠点にして同志が機動隊突破を実現しぬいたこと

かかるわれわれの闘いは、他方におけるZ戦の展開と結びついて、軍事を組織する党の質が強化されていることをはっきりと示しており、他の諸君の自然発生的なゲバルトがどんなに貴重ではあっても昨秋の敗北を何一つ乗りこえることを持ちえないこととは、明確に区別される革命的意義があるのである。われわれが一〇・二一の闘争戦術を全面的にやり抜いたことは、逆に初歩的な戦術でさえ、軍事を組織する党をもって初めて実践され得ることをはっきりと明きらかにしているのである。

第四には、わがBUNDの圧倒的登場の前に、わが愛すべき「護りカス」である表旗、情況派の右翼ブロックは、くっついたり、離れたりの「コップの中の嵐」をくり返し、階級闘争とは何も関係のない所でくだを巻くことに終始し一〇・二一闘争にはついに登場することができなかったことである。

叛旗派はサークル集団ようろしく単一部隊として結集することもできずに、我々への処女的強迫感から日比谷公園に姿さえ見せなかった神津某のドサ回り巡業も、我々の革命的鉄槌の前には何一つ効果をあげることができないのだ。

また僅か70名足らずの全共闘を寄せ集めてきた情況派は会堂の野外音楽堂から一番はなれた一角にたむろしていたのだが我々の行動隊一五〇が現われるや、ただちに逃げ出し、二、三の同志の恫喝でもって、列を乱して逃亡する状態なのである。一体何のために竹竿で武装してきたのか。かかる状態のない腑抜けの連中が、一時期たりともわがBUNDの片隅にいたことを許していたことを、我々は深く自己批判することを再確認したのである。

どんなに叛旗・情況派の諸君が悪あがきを続けようと、彼らの運命は今や明きらかである。我々の千四百の堂々たる隊列の前に、百程度のゴミクズ連合は余りに無力なのだ。

我々と叛旗・情況派との党派闘争は新たな局面に入った。我々はもはや一対一的対応に悩まされることはありえない。恒常的武装闘争を鉄火のBUND魂で闘い抜いていくこと、これが我々の道である。巨大な第二次BUND建設の闘い中で、彼らは階級闘争の歴史から「自由」になるであろう。

第五には、全国各地における闘争においても、赤ヘルの同志諸君は最も信頼するに足りる部隊として闘い抜いたことである。北海道東北、名古屋、関西、九州において、わが赤ヘルは不動の主流派として登場した。例えば北海道においては、三〇の動員に凋落した中核、青解を完目に反帝戦線百の部隊が一切を領導したのである。この間の革マル派との党派闘争を日和った諸党派に対して、わが同志諸君は多数の重傷者を出しつつも、断固としてこれを闘い抜き、革命的な前進を実現していることが実証されたのである。これは東北・九州においても貫徹されている。

東京におけるわれわれの闘いが全国的に外延化しており、第二次BUND建設に向けた闘いが全面的に進行していると同時に、首都・全国における階級戦線の最先頭にわれわれ自身が躍り出ていることが、はっきりと示されたのである。

叛軍闘争の新地平へ前進せよ

全国の同志諸君、戦旗読者諸君一〇・二一闘争の切り拓いた地平を更に打ち固め、ゆるぎない赤ヘルメットのヘゲモニーを全国至る所に固め、全ての戦線に恒常的武装闘争の革命的息吹を吹きこんでいこうではないか。

10·26 東京

小西叛軍裁勝利、全関東総決起集会が28、29の新潟現地闘争に先立つ26日、東京清水谷公園で労学六百余名を結集して開催された。わが反帝戦線と各地区叛軍行動委は、緊急行動にもかかわらず、これに二百名の部隊をもって臨み、終始集会を諸党派を圧倒して領導しぬいたことを全国の同志諸君、および戦旗読者諸君に報告したい。

当日は異常な寒さと雨をもともなう強風が吹き荒ぶなか、五時過ぎ公園に到着した赤ヘル部隊は、二十一日の防衛庁攻撃闘争の武装闘争の革命的意義を再確認し、それと同質の闘いとして、この日闘いを貫徹すべく固い意志統一をかちとり、七時十五分前、統一集会にのぞんだ。最初に全員のシュプレヒコールとインターの斉唱で開始された集会は、練馬叛軍からの基調報告を受けた後、隊反社、叛軍新潟行動委、PCS、小西三曹叛軍裁判で小西三曹からの発言を受けてこれを圧倒的な拍手で迎え、各地区叛軍行動委の発言に移っていった。

この集会における論争―党派闘争の基軸は当然のことながら叛軍闘争を「いかなる内実で」闘うのかについて焦点が形成され論争が展開されたわけだが特徴的なことは、われわれを除く諸党派がおしなべて、叛軍闘争を個別闘争の地平へ押し込め、一般的な反戦闘争反帝闘争の次元、即ち六十年代階級闘争の延長上にしか措定し得ないという、没主体性―無総括、無方針、無展望を露呈、自己暴露したことであった。とりわけ中核派にあっては、彼等の小西裁判闘争の位置づけにも見られるように「自衛隊の反人民的犯罪化の徹底的、大衆的暴露の場」「自衛隊合憲判決を阻止する場」「小西三曹の自衛隊復帰、自衛官の政治的諸権利を獲得する闘いの場」といったあれやこれやの小市民的、反自衛隊意識の上に「日帝のアジア侵略と対決し、人民武装を主張しそれを大衆的に確認する」なる「主張」一般を継ぎ足すという叛軍闘争の矮少化、カンパニア主義へののめり込みによって、それ自体間違いである「日帝のアジア侵略を内乱へ」が加えて全くの空語でしかないことを大衆的に暴露したのである。

これに較べ、われわれ赤ヘル系叛軍の最初の発言に立った神田叛軍の同志は、日帝の七十年代侵略反革命の総路線がその環、軍事外交路線として展開されており、これに鋭く対決する闘いを恒常的武装闘争の内実をもったものとして帝国主義軍隊解体―正規軍建設―ソビエト型組織建設の二つの内容において闘い抜くこと、同時にかかる闘いが唯一「政治暴露」一般を越えた七十年代における革命的政治闘争の大衆闘争としての展開に値し得るものであり、現在の反帝統一戦線の再編を叛軍行動委員会の組織化をもって遂行してゆかねばならないことを明らかにし、集会の基調を鮮明にしたのである。

集会の後、赤ヘル部隊を先頭に防衛庁から清水谷公園までのデモに出発、機動隊の規制にもかかわらず最後まで戦闘的に闘いぬき、この日の日程を終え、新潟現地闘争への組織化へむけ各地区に解散した。

10·21 仙台

【仙台支局】全国の党同志諸君！革命的な戦旗読者諸君！

仙台地区反帝戦線は、一〇・二一防衛庁闘争の断固たる貫徹に呼応し、防衛庁闘争へ精鋭一五名の動員を行ないつつ、八〇名の部隊でもって仙台の地における一〇・二一闘争を最後まで領導したことを報告する。

昨秋安保政治決戦の敗北後、すぐれて世界階級闘争の手づまりを突破するものとして、わが共産同が総括提起した「党の革命、革命の軍隊」の全階級戦線に対象化してきた内実を七月日本反帝戦線の結成、九月防衛庁―全国基地解体闘争の実践過程で「共産主義を組織する党」にまで飛躍発展せしめてきた。また、かかる世界党建設へ向けた純化は、当然にもわが反帝戦線をボルシェヴィキ的な組織性を抜きには強化できず、党内日和見主義の放逐を闘い取ってきた。仙台地区反帝戦線は、党の強化拡大、世界プロ独―世界社会主義―世界共産主義実現への現実的課題としての帝軍解体闘争を、一体化した方針のもとに展開してきた。

一〇・二一防衛庁闘争と仙台地区の闘争は、権力闘争の勝利へ向け、まさしく政治路線、組織路線の一体化し、昨秋以降の我が共産同、反帝戦線の全内実を全世界の革命的プロレタリアートに帝軍解体闘争として大胆に提起した。「帝国主義の侵略・反革命を世界革命戦争へ」のスローガンを、プロレタリア国際主義と綱領確立への意志一致は、それ故、仙台地区反帝戦線の不充分性を突破し、東北地方の八派統一戦線を解体止揚するものとして克ち取れた。

一〇・一六南部（学院大）を拿頭に、西部（東北大C）、北部（東北大医学部）を中心した各政治集会を連続し、一〇・二〇仙台地区反帝戦線総決起集会で、一〇・二一にのぞんだ仙台地区反帝戦線は、三時東北大片平の学生総決起集会を断固領導した。発言に立った北部の同志は、圧倒的な拍手のもと❶就中・アラブ、インドシナ革命戦争を、単一の権力＝世界プロ独へ向け組織し、ありとあらゆる民族国家の障壁を突破し、全世界を単一の共同社会＝世界共産主義社会へ牽引しなければならないこと、❷それ故、眼下の世界階級闘争は文字通りブルジョア階級支配・民族国家の障壁を打倒として、帝国主義軍隊解体こそ決定的な環であり、安保・NATO・ワルシャワ条約機構の反革命同盟、機構の解体にこそ展望されること❸プロレタリア世界革命の全過程の指導主体は、世界党であり、マ

10·26 名古屋

【名古屋支局】全国に先がけて、自衛隊パレード粉砕闘争を闘い抜いた愛知反帝戦線より闘いの報告を、日夜、日帝の侵略反革命に抗し、闘い抜かれている全国の同志諸君に送る。

七二年沖縄返還を、メルクマールとして、自衛隊の沖縄派兵、より強固な日帝の戦略先兵としての帝国主義軍隊化を、日帝そのものが七〇年代基本戦略としての軍事外交路線を、全面的に登場させ、現在的に、三次防から四次防へと拡大、全面化する真只中で、一方での自衛隊違憲論等の「平和秩序派」の最後の「課題」も、日帝の軍事外交路線に規定された国内の帝国主義的再編の先行性とその進行そのものに全く無知なる故、その「課題」そのものが「課題」としてさえ、登場せず、過去の甘い五〇～六〇年代型の大衆闘争がなにかしら即自的に、今後も起こりうるのではないかという幻想をみごとに打ち砕き、この七〇年代においては「屁」にもならないものであり、無意味である事が明らかにされていると考える。

一〇月二五日午前一〇時、一〇・二一防衛庁闘争の総括の視点を中央派遣部隊と、名古屋残留部隊で前日に意志一致した。我が愛知反帝戦線は名古屋特有の伊吹きおろしの寒風が吹きあれる中、自衛隊結成二〇周年祝賀記念式典を行っている名城公園に、べ平連の諸君と共に、市民向けのビラを配布すべく結集した。

会場には、家族づれが多く、子供の手をつないだ親や、老人の姿が目立ち、近代化された自衛隊＝帝国主義軍隊の、あまり整然としていない行進や、訓練に集中しているその「おとりこみ中」にこう然と我々は「帝軍解体」のシュプレヒコールを行い、混雑する人だかりのまわりで、ビラ入れを敢行した。しかし、すぐ私服と自衛官が、我々の数倍の人数をくりだし見物人から、我々を隔離するために、自衛官が、まるく円をつくるように我々を、とりかこみ、その中で、私服と警官隊が我々に暴行せんとしてきた。我々は、その場で徹底的に闘い抜き、敵にも数倍の報復を返してやった。我々は、その時どういうわけか、不思議に、うれしさが腹のそこから、こみあげるのを覚えた。軍団の同志諸君！なぐるにしろ、なぐられるにしろ、機動隊とやるときよりも、自衛隊とやる時の方が一段と楽しい！

この弾圧体制突破、打倒の闘いは、我々が、世界共産主義建設のために絶対不可欠な闘いとしてあるのだから。

名城公園では、そのようなわけで、あまりビラを入れえなかったので、ただちに隊列を整え、栄公園で、ビラ入れを、貫徹し、12時久屋広場にて、AIF単独集会、1時、10/25自衛隊パレード粉砕全愛知総決起集会に臨み、AIFの司会で統一集会を、領導し、反帝戦線旗を、先頭に、久屋広場より防衛庁施設局―ライオンパークのデモを、底ぎお分列行進でもって最後まで、貫徹した。我々の隊列の後に、「死を待つばかり」の中核は、「人殺し部隊＝自衛隊パレード反対」などという全くピンボケした位置付けで、チョコチョコとくっついてきたが、あまりバカげているので、問題にもせず、解散地で、AIF単独総括集会を行い、当日の全日程を、終了した。

全国の同志諸君、戦旗読者諸君！

日帝の侵略反革命を、内戦―世界革命戦争へと転化すべく、❶帝軍解体❷革命の正規軍建設❸ソビエト型組織建設を内実とする恒常的武装闘争の地平を、更に押し進め、形ガイ化している反帝統一戦線を、解体止揚し、蜂起の陣型へと、まっかな血を、流しこみ、革命的に再編する作業に、この愛知反帝戦線も、全力で行なうことを宣言したい。革共同両派、代々木との党派闘争に、着手し、現に、日共学外追放を、一カ月以上にわたり貫徹し、連日にわたる闘争を組んでいる同朋大学を、突破口に名大、名工大においても、徹底的に闘い抜き、叛軍行動委員会の建設も、着々と、進んでいることを最後に報告しておきたい。

現代無政府主義＝赤軍派へ更なる党派闘争の鉄槌を！

マルクス主義の本質的把握を拒絶、観念論への転落の証左

赤軍N06における概念的把握の無知

久しく階級戦線から脱落、召還し果てしない内部論争に明け暮れ数多くの逃亡者、スパイを生み出した現代無政府主義者赤軍派が実に三カ月ぶりに機関紙NO6とわずか二〇名程の革命戦線を引きつれて一〇・二一日比谷野音へと現われたのであるが、千四百余の日本反帝戦線ー各地区反軍行動委の暴力的登場の前に旗を巻きすごすごと退散ー消滅し膨大な大衆の中に溶解していったのは、われわれの意識する所ですら無かった。大菩薩の「闘士」達が次々と転向し『赤軍派の名を騙り"組織内情"を誠しやかに、ブルジョアマスコミに売り歩く……腐敗分子」を生み出していった過去を根底的に総括する事無くして「国際根拠地」建設ーハイジャックへと乗り移った結果は、赤軍派内中央軍派対革命戦線派の対立を契機として自壊が促進されると共に人民からの離反が決定的なものとなり、今秋武装蜂起どころか、下部同盟員の離反ーよみがえるブントへの結集のもはや覆い隠せぬ事実としてあらわれている。もちろん、われわれは赤軍派と訣別し ブントへ結集せんとする諸君を拒むものでは一切無いが、赤軍派の思考体系からの完全な訣別 抜きに考える事は出来ない事は明らかであり、その一助として「理論戦線NO9」において一程度その基準を示してきた。

即ち「赤軍ON1論文を（イ）労働者国家根拠地論、すなわちスターリニスト国家援軍論、（ロ）レーニン帝国主義の機能的あてはめとその教条的信奉主義、そして（ハ）スターリンと同じ資本主義の万年危機論にもとずく万年危機論型戦略、すなわち、万年武装蜂起論として批判の視点を設定する。」（理戦NO9ページ）として彼らの高次の自然発生性＝能動的・攻勢的世界武装プロレタリアートの把握の誤りに対する体系的批判を展開してきたのであるがかかる我々の批判に真向うから反批判を取り組む事を放棄し（勿論出来る訳も無い のだが）「左翼的」言辞で何とか取りつくろわんとする自己保身的態度（NO6掲載のブント批判を見よ！）こそ現在の彼らの反動的姿を示して余りある。

昨年7／6のブントからの逃亡と反帝統一戦線解体戦術の一面性は実に「党は階級の外にあって外にしかない」赤軍派として全階級闘争を対象化しうる地平を喪失しわずかに残る革命戦線ーパルチを通じてしか党派闘争ー大衆闘争の展開を保障しえず、もとよりそれは党ー「正規軍」の全面的全階級的活動の放棄と地下活動への純化として結果し全左翼戦線にわたる規定力の完全な喪失をもたらしていった。

まことに彼らにあっては理論的相違が直ちに一切の組織的分離としてのみしか把えられないのであって理論闘争を旧来の組織体八派解体止揚めざして内的外的に組織してゆく事が放棄されそこから飛び出る事によって自己の優位性を組織的に対象化するといった自己満足に陥り統一戦線戦術（組織戦術）等は対権力としてしか設定されないままその必然的結果としての敗北的状況を外的インパクトをもって何とか乗り切ろうとするのである。

鋭い党派闘争を実体的に推進することを通じてのみプロレタリアの権力的基礎をソビエト型組織として獲得してゆく事ができるという階級闘争の自明の理を忘れ、革命の情熱がほとばしる青年等に無継承・無体系・無総括の極めてせばめられた党派的意味付与を行い恫喝をもって納得させてゆくといったパターンは必然的に破綻し全理論内容の組織的総括が要求される今蜂起を呼号した事への価償が全構成員を捉えもう後へ戻れない部分＝中央軍と総括できる部分＝革命戦線との亀裂を生ぜしめているにもかかわらず党の正規軍として組織されていない革命戦線をもってしては数人の中央軍の 恫喝の前に屈服以外の道は無い。関東において絶滅し関西でわずかばり残存している 赤軍中央軍 が自壊の道を必死に建て直そうと懸命になって書き上げたno6こそその混乱の頂点である。

曰く「70年代連続蜂起」「大衆的蜂起準備運動」そしてまったくもって珍奇な「階級闘争を忘れた連合ブンドの変質ー戦旗派を解体し革命戦線に再編せよー」。赤軍派自らが解体され地区叛軍行動委への結集しか道の無い日が目前に迫っているのも知らないでホラを吹き続ける現代のドンキホーテに更なる鉄槌を加える為NO6に対する批判を中心にしつつ我々の自己純化を克ち取ってゆきたい。

1、革命論理解の反マルクス主義的傾向について

Ⅰ革命論理解の反マルクス主義的傾向

世界同時革命戦略としての権力闘争論（狭義の革命論）を導くものとしての世界共産主義論、世界党、世界赤軍、世界反帝統一戦線論、世界一国同時革命戦略論、過渡期世界論として対象化される広義の革命論体系の把握についての故なき批判からまず答えてゆこう我々は革命論の科学性が戦略論の科学性によってこそ根拠づけられるという立場に立って革命論の方法論を宇野経済学方法論に依拠し経済学方法論を単なる対象認識の素材としてでなく対象変革の理論的定在として把え返した。その事は方法の問題の基軸をヘーゲル大論理学からマルクス序論の弁証法へと継承された＜概念的把握の論理＞の中に求め、資本制的商品から始まる思惟の上向 過程を対象世界の論理的・歴史的・実践的把握という三段階論によって捉える事を通じ実践性＝場所性を示す現状分析から戦略ー戦術を導き出すことによって革命論の科学性を明らかにせんとしたものに他ならない。ところが赤軍派はNO6において、我々が「具体的なマルクス主義の主体的に総括されるべき問題を普遍化して「経済学方法論」の対象変革の理論的定在化を行う事から、共産主義者の能動的実践というプロパーを捨 象して しまう」等と捉え、具体的な問題は具体的なレベルで解決すべきであって下向・上向を通じた本質論的反省による戦略の科学性は何らの実践をも導かないという恐ろしい反マルクス主義＝現代無政府主義の本質を暴露している。

「マルクス主義の主体的に総括されるべき問題」であればこそ序説の弁証法の何たるかも解さぬ彼らに最も必要な問題提起をし党のための闘争に役立たん事を願っているのに、「経済学」という文字を見るだけで恐怖し嫌悪感をさえ生ずる彼らにあってはより科学的なイデオロギーであればあるほど空気の入らぬものなのか。それでも彼らはくやしまぎれにデタラメな概念的把握の方法を展開している。「NO2で「共産主義者とは戦略＝革命論に於て、日々対象変革・革命的実践活動を行っている者をもって規定する事は不充分であり、これのみにとどまらず階級形成↓党形成↓階級形成の一環としての党の自然生長性を克服する党の為の闘争を媒介として、総体としての 階級形成を行って いる者」を措定し、党ー階級形成一元論を明示した事は、共産主義運動総体の概念把握の方法、即ち方法の問題の鍵を確立した」という叙述は一体マルクス主義者と自称する者の書いた文章であるのか疑問を持たざるを得ない程混乱しており、やっぱり概念的把握も何もかもサッパリ分っていない事を示している。

例えば、彼らのいう「党ー階級形成一元論」なるものそれ自身が党・階級の論理的・歴史的反省↑↓把握を行為的現在における場所的立場において統一する事、ないしは普遍本質論的内容としてのそれにしろ資本主義社会の原理的把握を経済学を通じて解明することによってはじめて規定しうるのであり、かかる方法をとらない限り必ず単純商品経済拡大史観といった教旗と同じような史的唯物論を基礎にせざるを得ないのである。

資本制社会をのっぺらぼうに唯物史観の公式で把えるという先験性に犯され革命的 実践を恣意的産物としてしまう彼らにあっては「党ー階級形成一元論」すら何ら科学的に論証されること無く過渡期世界への突入と「武装世界プロレタリアート」の登場を彼らが発見した事によってはじめて共産主義者の「能動的実践」の一環としてその把握が出来た事を無意識のうちに告白している、という事自身が実は「マルクス革命論を革命論の普遍本質論として捉える」われわれに反対する彼らの論理矛盾を自己暴露しているものに他ならないのである。

彼らはマルクスが「序説」においても述べている「生産力と生産諸関係なる両根幹の弁証法」については確立したが、共産主義的意識の大規模産出ー人間の大量的変革ー実践的運動ー革命（ドイ・デ）とそれとの連関ーその総合環としての共産主義者の能動的実践、プロレタリアートの級階形成と、更にその把え返し＝共産主義運動総体の概念把握については確立し得なかったのである と主 張する時すでに、なぜマルクスが「序説」における概念的把握の論理とその適用としての「資本論」の叙述を通じて「経哲草稿」の「疎外された労働」論の克服を「ドイツ・イデオロギー」における唯物史観の定立として目ざしつつも完成しきれなかった課題を止揚していったのかが、いいかえるならば本源的蓄積過程における労働力商品化を基礎とした市民社会ー国家の分裂を自律的な経済過程の法則的解明による一歴史社会としての資本家的商品経済社会の経済法則の対象化を通じて土台と上部構造の関係を明らかにし、もって生産力と生産関係の矛盾なる唯物史観の公式をより科学性をもって論証していった事がまったく理解されておらずその普遍本質論的内容を基礎にして更なる革命論の普遍本質論的内容、特殊段階論的本質論的内容その現実形態論的適用の深化を獲得しうる事に無知なのである。彼らの「発見」なるものもその疎外された「現実形態」である。このように唯物史観とそれに基く過渡期世界論、世界過渡期論・世界社会主義論・世界共産主義論ETCの解明を一本のたて糸で結ぶ資本家的商品経済社会の法則的解明を「序説」の弁証法をふまえた「資本論」によって行っていたという革命論の根本問題が回避せられる限り「世界史的段階（大歴史）の特定のその歴史段階（中歴史）のそのまた特定の小歴史段階」として区別される「（イ）唯物史観（階級闘争史観）の領域における過渡期世界の措定↓（ロ）現代帝国主義論と現代帝国主義国と世界プロレタリアートを通した、過渡期世界の現実形態的措定（ハ）特定の歴史的場所的階級闘争の措定としての現状分析」（いずれも第一次綱領としてのNO4より引用）の相互連関がまったく明らかにされなく、過渡期世界という共通項に歴史というカビの生えぐあいで習性主義的な振り分けをしたものに戦略戦術を加えたものを最大限綱領と呼ぶ観念論者＝赤軍派の惑ぎれた貧困なイデオローグはかかる（イ）（ロ）（ハ）の論理展開された「綱領」は、不断に実践的連関を育するものであり決して両者がスコラ的に分離されるものではない」と豪語しつつも直ちに「我々はNO4に於て、この問題についての若干の混乱を見出すことができる」と暗にスコラ的であった事をほのめかしつつ、にもかかわらず「NO4は……自らの混乱を整理する導きの糸を我々に与えており」等と何が導きの糸であるかも分っていないくせに言う事だけは一人前なのである。

マルクスが革命論のすべてをいいつくしていない事をもってマルクス革命論を普遍本質論として捉える事をきらう赤軍派は「レーニン主義の成立が、意識性としてのみ主体の能動的実践を展開しようとし、それ故両者の関係を「プロレタリア運動の現在の利益を代表する」「未来を代表する」として混乱してしか提起し得なかったマルクスの限界を主体の組織ー党建設に統合した点にあったとはいえ……後期レーニン主義は……「社会主義への移行を援助する党」として、ボルシェビキの任務を設定したが 故に……「世界 党建設」「ロシアプロ独」の分裂状況に陥ち入った事。従って、共産主義者の能動的実践とは、武装した世界的主体が社会主義を切り開く事であり、且つそれは「世界党建設としてしか党 意識をなし えない」「マルクス主義を固所する時……永続革命論と、世界市場ー世界恐慌を含めた経済過程は……共産主義者の能動的、組織的実践への統合が語られはしなかった」といった風に、党宣言をはじめとする階級闘争の諸規定（階級・共産主義者・党・コンミューン）をもって普遍本質論的内容となすのでは組織論レベルにおいて不十分であることをもってマルクス革命論の普遍本質論としての把握を拒否するのである。そしてそれと共に概念的把握の論理まで忘れてしまおうとする彼らであるが、そもそも我々がいう レーニンあるいは 我々の革命論の中に新たな普遍本質論的内容が存在していない等と主張しただろうか、まじめに本を読みもしりでいたずならに批判の為の批判、世界一国同時革命戦略論の無理解の検証

Ⅱ世界一国同時革命戦略論の無理解

次に権力闘争に関する問題であるが彼らはわれわれが「帝国主義打倒しスターリン主義打倒」の二段階戦略論を公然化したと非難しているのだがその事は世界一国同時革命戦略論と世界同時革命戦略の区別と連関をふまえられていない所から混乱が生みだされているのである。そもそも世界一国同時革命戦略論として現代帝国主義・現代「過渡期社会」総体の論理上同時止揚を過渡期社会におけるスターリニズム・ブルジョア意識との闘いそのものまで射程に繰み込みつつ対象化する事を放棄している赤軍派は、現在の党主体の場所性に規定されざるを得ない戦略の措定を理解しえず蜂起＝権力奪取に媒介された内戦＝世界革命戦争への突入を読んだだけでもはや世界二段階 革命戦略論 へとわれわれが転落したと思い込んだらしいいやそれどころか「スターリン主義の内在的止揚過程を辿り始めた労働者国家、後進国左派（？）とわれわれが、先進国権力闘争ー蜂起を媒介に、先進国人民蜂起ー労働者国家の組織された分派闘争を世界党ー世界赤軍の指導下に一体的に貫徹して、始めて根拠地ー大量の赤軍建設ー生産の組織化、先進国を主戦場とする攻勢的世界革命戦争ープロ独段階を迎える」といみじくも彼ら自身が「労働者国家」の変革の困難性を「先進国権力闘争ー蜂起を媒介に」してしか考えられないとしているのであって、その場合権力闘争ー蜂起を「連続蜂起」論にみられるごとく安売りしているのであって単なる帝国主義国内都市ゲリラの遂行によってあたかも「労働者国家」として組織されたスターリニストの打倒が可能となるかの如き規定力を有するものとしてスターリニスト左派との野合をもくろんでいるのである。

我々は勿論スターリニスト左派との国際的党派闘争を通じて「労働者国家」内部での補足的第二政治革命をめざすにもかかわらず現実過程において戦略として措定しうるかかる組織的根拠に基いて日帝打倒から世界革命戦争を展望せざるを得ない。北朝鮮へのハイジャックをもって国際根拠地建設ー世界革命戦争統一戦線の可能性を現在的課題とし、のっぺらぼうな国境を越えた世界革命戦争を展望するお人好しな赤軍派は金日成やカストロに門前にもされずコケにされ、やっぱり「現在が未だ党ー軍建設運動を中軸とするブルとの対峙段階……。……国際 活動が不断に国際反革命との軍事対決を伴いつつ展開され、……先進国赤軍の建設ー蜂起への集中的活動とプロ大衆の「蜂起ー革命戦争」に向けた「戦闘組織の確立」をもってしてなぜ世界同時蜂起ー革命（まさに時間的同時であるそうだが）が可能なのかがまったく明らかにされぬまま終ってしまうのである。従って蜂起＝権力奪取↓内戦＝世界革命戦争へ向けた恒常的武装闘争の三つの規定❶帝軍解体❷革命の正規軍建設（党の正規軍）❸地区ソビエト型組織建設も何ら主体的推進構造として対象化される事なく、大衆の「戦闘組織」を語ることによって赤軍の都市ゲリラと呼応する大衆組織形態に換え何らのプロレタリアートの権力実体的基礎を打ち固めていく事に対する捉え返しも無いのである。

そもそも七月日本反帝戦線結成大会で明らかにされた恒常的武装闘争における過程的推進構造とこの間一貫して主張している蜂起↓内戦論に関する主体的取り組みをも理解しえず「二段階戦略論」だとか「一国主義」だとか「戦闘組織もなしに闘えという主観主義」などと核心を回避したやぶにらみ批判を続ける限り彼らは決して浮かばれない事をわれわれはつきつけてやらねばならない。われわれは共産同の真紅の旗をけがす第二次ブントの否定的残滓、赤軍派を粉々に打ち砕いてしまうために次号において更に現状分析ー戦略ー方針にわたって全面的に機関紙N06における見解を批判しつくし全関東から彼らを追放すると共に京都にわずかばかり巣くう彼らに最後の鉄槌を加えてしまうであろう。

16集会アピール

弾圧はねのけ「第二の10・8へ」

久保井拓三

共産同政治集会の会同志に挨拶を送ります。

六月以来絶えて久しかった「反暴力キャンペーン」が一〇・八羽田闘争三周年記念集会をもって開始された秋の闘争と共に、再び強められつつあるようです。

この性懲りもなくくり返される悪意に満ちたデマと中傷こそ、支配者階級の憎悪と恐怖の率直な表現であることを物語っています。

だが今回の「ゲリラ四派」なるものに照準を合わせた攻撃の性格を注意深く観察すれば、誰でもが気づくように、その攻撃の中心が赤軍派や京浜安保共闘壊滅作戦の一定の成果の上にたって明らかにわがRGーAIFにむけられているということです。そしてこのことは重要です。

この間の攻防が明らかにしたことは、われわれの七〇年安保闘争の敗北にもかかわらず、だがしかし、敵は一撃でもってわれわれを粉砕するだけの力量はとうてい持ちあわせてはいなかった、ということです。そしてこのことは、それ以上に、われわれのたった一撃が、現下の階級関係を一挙に切り拓き、攻勢をとることができるほどには、われわれは弱くない、ということをも意味しています。われわれが、今、当面の目標として実現しなければならぬこと、全ての努力を傾注して実現しなければならぬこと、それは「第二の一〇・八」をわれわれの手によってかちとることでなければなりません。恐らくそれこそが、現在の反動的封じ込め状況ともいうべき階級関係を突破し、恒常的武装闘争の一時代を更に質的に飛躍させる、輝やかしい幕あけをなすことでありましょう。

しかし、あの六七年一〇・八羽田闘争ですら、六〇年六・一五闘争の挫折以来、七年間の苦闘の中からはじめて実現されたものであること、ましてや、階級闘争の飛躍が、単なる「目的意識性」一般の強調や「蜂起」をもてあそぶことによっては獲得されないどころか、逆に厳しい報復を受けなければならなかった、ということを誰よりも深刻にわれわれは教訓化しているはずです。

このような状況下における帝国主義者の狙いとは、いうまでもなく、わがRGーAIFを「第二の赤軍派」として葬り去り、その「茶番劇」ぶりを宣伝することにあるといえます。そしてもし帝国主義者がわれわれをたったの一撃で解体することに成功するとするならば、それは、われわれがたった一撃で敵を打倒することができるだろう、と考えた時だけ可能であるということです。

われわれは「第二の赤軍派」として「茶番劇」を演じることを断固拒否することでなければなりません。そうではなくわれわれは「第二の一〇・八」を演ずる主役へと飛躍しなければならないし、又、それに成功するでしょう。

党、軍、統一戦線の革命的再編にむけたより一層の前進を期待しています。市民社会からの隔離を余儀なくされているわれわれにとって、この支配者階級のRGーAIFに対するデマと中傷が、実はわが同盟の健在ぶりと前進を労せずして知ることができる好適なデータになっているとするならばそれはなんと皮肉な現象なのでしょうか。

久保井拓三

中村、白尾両君に実刑

東大裁判…地裁熊谷裁判長

東大安田攻防戦を、わが赤ヘル、軍団のプロレタリア世界革命への限りない献身性をもって最期まで闘いぬいた、赤ヘル被告同志に対する報復的弾圧が「判決」の名をもって二十八日ふたたび行なわれたことを報告する。

安田七グループ（中村進、白尾直行ー両名ともブント系）に対する判決公判は十月二十八日午前十時より地裁七〇二号法廷熊谷裁判長係りで行われ、ただただ二名の革命的同志の刑務所送りの追認のみを使命とする熊 谷は、 得意の「退廷！」を織り混ぜつつ盲昇ー実刑「判決」文を読み上げたのである。公判は、まず以て前回の被告中村君に対する監置ー反革命的訴訟指揮に対する弁護人、被告人の追求から開始された。裁判の初期の段階では「ハト派」として振舞おとしてきた当裁判官が実は不当な訴訟指揮をもって被告人弁護人の正当な発言を封じ込めてきたこと、かかる延長上に判決公判が設定されるのは全く不当であり、その強行は「分離公判」そのものが、司法権力の反革命的性格の表現であることが明らかであることを弁護人被告人が追求する、熊谷は当然にもこれらの主張を無視するに及び、弁護人は、一方的に判決文を読み上げるだけの公判ではもはやそれは裁判ではあり得ず弁護人が存廷する意味は見い出せないと宣言し退廷することとなる。熊谷はいよいよ「判決」文を読み上げようとするが、傍聴席を埋めた反帝戦線の戦士は一斉に抗議を表明し、二名が暴力的に退廷させられる。

帝国主義者の鉄鎖からの解放ーブルジョアジーを一人のこらず殺するその日まで。われわれは被告同志との闘いの連帯のインターー合唱のうちに表現し地裁をあとにした。なお、当日の判決内容は以下の通り。

中村　進（明大）一年一〇カ月実刑未決算入一八〇日（求刑二年）

白尾直行（明大）一年六カ月実刑未決算入一八〇日（求刑一年八カ月）

全国の戦旗読者諸君。弾圧の性格は明白である。七〇年代初頭をわれわれに対する先行的弾圧であり、それは、例の福島判事をして「憲法に書かかれてあることは誰でも知っているが、現実がその通りに行なわれていることは誰も信じなくなるだろう」といわせしめたところの現在的帝国主義国家権力の性格である。だが、裁判闘争においては原則的にわれわれの後退はあり得ない。恒常的武装闘争ー党の革命の基調は、裁判闘争の領域でも断乎としてわれわれによって維持推進されてゆくであろう。中村・白尾両君の控訴審請求、保釈請求の手続きは直ちに行なわれており、かつ一方では裁判闘争の戦術方針問題をめぐって、六〇年代へと反動的回帰をとげつつある諸党派の「戦略論」的内容を反映し、その日和見主義が露呈しつつある。東大裁判闘争をはじめ現在の諸々の裁判闘争は、ますます党の革命ー反帝統一戦線の革命的再編ー非公然党の建設の問題に対する重大 なる決意を 要求している。

久留島同志保釈！

【大阪支局】十月九日、弾対をはじめとする諸同志の努力によって、六ケ月に及ぶ勾留の壁が打ち破られ、ここに出獄したことを全国の同志たちに報告しておきたい。

弾薬輸送列車闘争より始まった政治警察と共産主義者同盟最精鋭部隊たるRGとの攻防は、その苛烈さにおいて例を見ない。政治警察は必死の追撃にもかかわらず、RGの壊滅に失敗したのみならず我が党、共産主義者同盟には一指も触れることは出来なかったのである。更にこの間の××戦において俘虜にした我々を政治警察は今秋闘争を前に釈放せざるを得ないところまで追い込まれているのである。ここに我々が政治警察に勝利したことは明らかである。

この勝利は、まさに共産主義者同盟の「軍事を組織し、共産主義を組織する党」への革命の一つの成果である。我々は、この勝利を踏まえ、変わることなく「党の革命」の最先端に立ち、権力闘争、党派闘争を闘い抜き、「帝国主義軍隊解体、革命の正規軍建設、ソビエト型組織建設」の恒常的武装闘争を推進し、蜂起の陣型を打ち固めていくであろう。

赤軍派以来、一年余に亘る党内論争の深化にもかかわらず今なおRGとは何かを理解せずRGをあれこれと矮 小化しようとする部分を粉砕し党の戦略部隊としての位置を知らしめるであろう。

共産主義者同盟万歳！

RG万歳！

AIF万歳！

政治警察の戦旗社襲撃に抗議する

共産主義者同盟

敵権力ー政治警察は、十月二九日白昼盗人同様に東京戦旗社を襲い、わが同盟に対する反革命弾圧を加えてきた。午前十一時頃、一〇・二一防衛庁闘争における六本木事件を口実とし事務所に、入した犬共は、たまたま同時刻にわれわれが居わさなかったことを幸いに事務所内を荒し放題に荒し、戦旗数部を持ちさっていったのである。

われわれは、かかる敵権力の卑劣な攻撃に対して断乎抗議するとともに、われわれに対するこの攻撃が、この間の敵権力のわれわれに対する新四派なるキャンペーン・フレーム・アップ・スパイ等あらゆる情報網の駆使による、われわれの組織壊滅をねらう弾圧の嵐に対して、われわれが勝利的に耐えぬき、かつ一〇・二一防衛庁闘争をもって、諸党派の反動的回帰をしり目に、七〇年代革命闘争への確実な歩みを圧倒的な組織力量、戦闘力をもって画したことに対する敵権力の恐怖の表現であることも、われわれははっきりと見ることができる

全国の同志諸君、戦旗読者諸君！かかる弾圧によっては、当然にも、軍事をはらむわが同盟の組織実体がいささかも敵に明らかになることは全くない。わが同盟は秘密の一切を集中した体制を堅持しつづけている。日常茶飯と化した敵権力の増々盲目的弾圧に対しては、われわれは増々公然ー非公然の領域を強化し、軍事をはらむ党組織を更に堅固に鍛えあげ革命戦争への突をもってその解答するだろう。

読者からの 〜手　紙〜

前略　一読者ですが、農業問題についての大胆な論文の発表を待っています。

それから四トロ批判を特集的に取りあげて下さい。それからパルチザン的闘争に対して革命の正規軍を対置するのは正当だと思いますが、武器の問題が明確でないと自衛武装の現在的闘争からの革命の正規軍は、いかに成長するのかその点を明きらかにしたならばR・Gの位置ずけもよく鮮明になると思うのですが。

それから中核派批判を反権力の視点から批判・粉砕した論文を次回に載せて下さい。

「反スターリン主義」というかたちに歪曲してしかとらえる事のできない革共同の大衆追随主義の本質を暴露して欲しいのです。

以上、ようしくお願い致しますこれらは常日頃、思っている事です。反帝統一戦線の名のもと、党派闘争が放棄されてはならないと思います。激烈なる分派闘争を闘い抜いた党派の革命的成長を一読者として見守っているのです。

とにかく他党批判に最大のページをさいて欲しいのです。私には分派闘争のエネルギーのみが目につくのです。いかなる小グループ的集団であれ、一つ一つに革命的前衛党の方針、戦略、政策から最大の批判を！その事によって革命戦線への合流を！マル戦、赤軍、情況・叛旗、MLの批判特集を！

葛飾区　一読者

前略、

北部の者ですが、第四インター系の諸分派の個別的批判を次号の誌上に掲載し、徹底的に撃破して下さい。

もう一点は、他党派との理論闘争を集中的に載せて下さい。他には、世界革命情報を固定したコラムをもうけ、毎号載せて下さい。以上。

今号ははほ同じ趣旨の読者からの「戦旗」に対する要望の手紙を掲載しました。第一点の他党派批判ということですが、今号には赤軍派批判（上）を掲載したようにこれまでにも増して他党派批判にスペースを割く編集方針を確認しております。その際、まずもって第二次共産同の否定的残滓 として今ではなぜ自らがかつて「ブント」に結集していたのかさえ根底的に疑わせる程に腐臭を放つものに転落した、赤軍、情況、叛旗批判をわれわれは優先させなければなりません。

われわれが、正しくも「オオカミ少年」としてその末路を喝破した「赤軍」派は、三ケ月ぶりに発行した「赤軍NO6」において、「連続蜂起」だの、「大衆的蜂起準備運動」等ということによってその堕落ぶりを露呈していても、そして情況派が、どこに存在しているのかも明きらかにせずに「ローテ」なる機関紙を発行し、その内容 たるや、五年 前の「先駆」（「戦旗」復刊以前の第二次共産同建設への過程で発行された）以下でしかなく、そもそも「再建」すべき「共産同」の革命的頭一伝統を一貫して汚してきたことを証明している現在、自らの胎内から生み出したかかる「クズ」を発生せしめる余地を理論的、組織的に完全になくさせるためにも、再度われわれは、これら第二次共産同の否定的残滓 との党派闘争を貫徹します。

その上で、われわれは、反帝統一戦線の下に結集しつつも、その革命的再編の方向性を見い出せないことによって、反動的回帰を試みる部分への仮借なき理論・組織闘争に進撃することこそ緊急に問われている課題だと考えています四トロ批判に関しては、さしあり二三七・八号「入管闘争方針」を参照して下さい。「エセ国際主義」の基本的性格が明らかにされて います。「赤軍」派批判、「情況派」批判の次には当面、飛べない「よみがえる不死鳥」を生み出した社会党解放派批判を予定に組んでいます。

一〇・二一闘争において、実体的にも第二次共産同をのりこえたことを示したわれわれは、政治警察との闘いと一体的なものとして革マル派、代々木解体をも射程におさめた党派闘争の勝利的展開に向けて「戦旗」は編集されていきます。

なお「農業問題」については、現代帝国主義論の中で明きらかにされねばならない課題ですが「戦旗」では直接に扱う予定は現在ありません。世界革命情報を毎号コラムでということですが、むしろ六〇年代階級闘争総体の総括と諸党派の動向の分析がまず問われていると思います。来年初頭にはそのような企画が実現されると思います。

以上

（一面より）

折りも折り、帝国主義ブルジョアジーは「第四次防衛計画」の大要を発表した。その内 容たるや「平和国家」とか「自主防衛」などのお題目とは全くかけ離れた徹頭徹尾帝国主義的な代物であることが一見して見てとれるのである

総額五兆八千億円に登る四次防はその規模からして、従来の一次防・二次防・三次防の合計に匹敵するものであり、その質において完全に上回っている。自衛隊員の拡充、装備の近代化・ミサイル化軍事戦略上の転換等々として「侵略からの防衛」などとは無関係であり、東南アジア・極東アジアを対象としての米帝と共同した国際反革命を推進していくものとしてかつ「国内治安体制の強化」としてあるのである。

自衛隊が朝鮮戦争のさ中に「警察予備隊」として創出された前史以来、本質的には徹頭徹尾帝国主義軍隊としてありながら、日本帝国主義の発展過程と国際階級闘争の発展過程に規定されて、それは社会の裏側で奥深く進行してきたのである。しかしながら、今や日本帝国主義は敗戦帝国主義に特有な国内設備投資の主導から商品・資本輸出の主導に生命線を賭ける現代帝国主義の一つとしてはっきりその構造を転化させ終え、東南アジア、北米大陸における米帝との抜き差しならない対立局面に入りつつ、同時に国際反革命を自らが積極的に担っていくことによりその展望を開いていこうとする局面に達しているのである。

他方、六五年以降強化されたベトナム南部の武装民族解放闘争はスターリスト的な歪曲と限界を根底において有してはいる（従って合流論は底抜けのプロ・スタなのだ）けれども、五四年のジュネーブ協定でのホー・チ・ミン＝毛沢東の階級的裏切りへの即自的な反省と国際反革命軍の存在故に、それ自身が外延化し、「大陸革命戦争」として拡大していかなければ一国民族闘争の展望も閉ざされているが故に、インドシナ一帯へと拡大している現実があり、更には対イスラエル民族主義の枠の中で「ナセル主義」に包摂されていたアラブ階級闘争が、その展開自身が民族主義の枠と衝突していくという高次な自然発生的傾向を増大させ、毛沢東主義者の存在をテコとしつつ、自国政府との対決の局面に転化せんとしている現実があるのである。

先進国日帝足下におけるわが革命的左翼もまたかかる後進国武装民族解放闘争の「英雄的」展開に突き動かされて、ベトナム反戦闘争の大衆的昂揚を媒介として、自国帝国主義打倒をプロレタリア世界革命における場所的任務の契機として世界戦略の中に明確に措定し、その実現に向けての前進を開始したのである。六七年一〇・八羽田闘争以降の日本階級闘争はかかる局面にあった。

現代革命を模索せんとするこの闘いの重苦しく困難な渦中で、総体としての六九年の敗北をへつつ一方では後進国民族解放闘争の拡大に一切の展望をたくす日和見主義を合流論派として生み落とし、他方、国主義に純化する傾向を生み出しつつも、まさしく世界革命の実現に向けた革命的前進を大胆に進んでいるわがBUNDと先進的労働者、学生に手によって、その止揚の方向が着実に進んでいるのである。

このような日帝の経済構造の推転と見事に照応する国際的な階級闘争の展開は、日帝をして、国際反革命同盟の強化へと突き進ませている。三次防から四次防への過程は、これを政府的に実現していくものとしての意味があるのである。六五年以降全面化した帝国主義的社会再編は運輸・交通・通信部門から生産点・学園へ全面的に進展しているのであるがそれは今や自衛隊の帝国主義軍隊としての確立が最も重要な焦点となってきているのである。

しかもこれを基礎にして、七二年沖縄返還による自衛隊三千二百名の沖縄派兵が強行されようとしている。日帝にとって、一般的な「施政権返還」が重要なのではなく（もちろんそれ自身は独自にその意義を明らかにする必要がある）沖縄への自衛隊の派兵をもって、沖縄のアジア反革命中枢基地として役割を強化していくことが狙いなのである。その布石は既に首示された「国政参加選挙」によって、スターリニスト、社会民主主義者を引きこみながら進められているのである。

同志諸君、戦旗読者諸君、このような情勢をはっきりと見るならば、われわれの方針は今や明きらかである。日帝の総路線として軍事外交路線に対する革命的反撃の烽火を全国至る所で プロレタリア・学生の団結した力でもって闘い抜くことである。

一一・一自衛隊はその力を誇示して全国で軍事パレードを行う。我々は指をくわえて坐視することはできない。既に小西元三曹の自衛隊内部からの革命的叛乱を契機にして、全国の各基地で現役自衛官の治安訓練に対する拒否闘争や組織的な反戦闘争が拡大している我々の闘争が市民社会深部にまで根づき、かつブルジョア国家機構の部分にまで浸透していることを確認すると同時「内からの叛乱」一般を幻想化することなく、それはまさに我々の正規軍建設のメダルの裏側として促進されるべきものとしてはっきり把え返しつつ、革命的赤軍闘争を更に前進させていかなくてはならない。

日帝の総路線と対決し、帝国主義軍隊解体というすぐれて戦略的展望に規定された広さと深さを有するところの全人民的政治闘争の環として叛軍闘争を位置付けていかなくてはならない。諸党派の如く小西裁判に引きつけた個別闘争として叛軍闘争を位置付ける右翼的本性と御都合主義を徹底した党派闘争が必要なのである。そしてかかる闘いを本質的に保障するものこそ、正規軍建設とソビエト型組織建設の主体的な推進であり、我々自身が権力闘争の質を獲得していくことなのである。

一〇・二一防衛庁攻撃闘争においてわれわれはこのような七〇年代階級闘争の方向について、全てのプロレタリアート・学生を領導することができた。この成果をわがものとし、一層恒常的武装闘争の革命的意義を全国に押し拡げていかなくてはならない。

一一・一〇首都防衛庁攻撃闘争を頂点にして、全国各地で自衛パレードに対する大胆な攻撃を準備せよ。反帝戦線ー叛軍行動委員会の赤ヘルの同志諸君は最先頭に立って、勇敢に闘い抜け。

（一面より）

ルクス以降のこの原則が、過渡期世界に入り歴史的に現実のものとなり、世界革命戦争は唯一人世界党ー世 界赤軍ー世界反 帝統一戦線＞で担われること、❹世界革命戦争の基本テーゼ、「帝国主義の侵略・反革命を世界革命戦争へ」を踏え、蜂起・内戦、世界革命戦争までの恒常的武装闘争は、党ー軍ー統一戦線として射程され、組織過程は革命の正規軍を頂点に、蜂起の陣型へ一切向けられ、八派反帝統一戦線の根底的止揚が問われていること、❺仙台地区反帝戦線は、「党の革命、革命の軍隊」「共産主義を組織する党」を、反帝統一戦線の解体止揚を防衛庁闘争で、一一・二自衛隊パレード粉砕闘争で断固克ち取ることを発言した。

デモは、二〇〇〇名を越え、五時からの労・学、市民総決起集会は、ますます密集し増していく反帝戦線が中央を占め、党派闘争の勝利者は、プロレタリア世界革命は反帝戦線しかないことを白日のものとした。

集会の後、仙都前までデモを展開し、全体総括を11・2自衛隊20周年パレード粉砕闘争へ決起せよと集約し、新たな意志一致で午後九時解散した。